ニクバエ類 4 個体が羽化した。その他にアブ類 2 種と寄生蜂 2 種を得た。
(長大・大村保健所)

紙 上 発 表

鴨川産 *Physa* 類の医軟体動物学的研究 (第 2 報)

杉 原 弘 人

Sugihara, H.: Medical malacological studies on *Physa* sp. in Kamo River

鴨川における *Physa* 類の分布とその棲息状態について調査したので報告する。京都市上京区の北大路橋より、桂川合流点の伏見区横大路まで約 10 km の間に 40 カ処の調査地点を定めて調査した。鴨川における分布は出町橋上流 50 m の位置にある治水ダムの下より鳥羽大橋の間に広く分布し、特に二条橋より八条大橋の間に多数棲息する。*Physa* 類の棲息の関係をみると、最も関係の深いものは水質の汚染度、即ち、 KMnO_4 消費量との関係である。一般に KMnO_4 消費量 10 p.p.m. 以下の水は汚度が低いとされているが、この調査地点の中で 10 p.p.m. 以下の処は 22 カ処で、その中で *Physa* 類の棲息しているのは 16 カ処 (72.8 %) である。又 10 p.p.m. 以上の 14 カ処で *Physa* 類のみられるのは 8 カ処 (57 %) である。10 p.p.m. 以上で *Physa* 類の棲息していない処は 20 p.p.m. 以上の処が多い。鳥羽大橋より下流に *Physa* 類の認められないのは下京区、右京区の工場地帯の工場排水がこの橋の近くで流入するため汚染度が増加し *Physa* 類の棲息に適しないためと考える。つぎに *Physa* 類と塩素イオン量の関係をみると、*Physa* 類の棲息しているのは 12 p.p.m. 以下の処が多い。石灰含有量と *Physa* 類の棲息の関係は余り認められず、10 p.p.m. 以下の処に於ても、又 20 p.p.m. 以上の処でも多数棲息している。*Physa* 類の棲息していない鳥羽大橋より下流地点ではアルカリ度が 7 p.p.m. 以上で他の調査地点より高い。*Physa* 類は水陸両棲の貝類であるので溶存 O_2 量の増減が直接棲息に影響を与えるとは考えられない、即ち、松原橋西岸の停水は 1.87 cc/L (O_2 飽和度 24 %) にすぎないが多数の *Physa* 類が棲息している。pH は一般に 6.6-7.3 であり、pH による影響は認められない。つぎに *Physa* 類と他の貝類との共存の状態をみると、*Physa* 類の棲息する 25 カ処の中でモノアラガイ類と共存しているのは 7 カ処、カワナナ類と共存しているのは 2 カ処である。従つて *Physa* 類は他の貝類と共存することが少ない。(京都府立医科大学・医動物学教室)

シロハシイエカの翅脈柄室比について

松 尾 喜 久 男

Matuo, K.: Studies on the venal ratio of *Culex vishnui* Theobald

京都附近に分布するコガタアカイエカの雌成虫翅脈柄室比が従来の知見と著しく異つており、コガタアカイエカとシロハシイエカ雌成虫は従来の記載に於ける翅脈柄室比の差を目標としては鑑別出来ない事を第六回衛生動物学会で報告した。今回はシロハシイエカの雌雄成虫翅脈柄室比を測定したのでこゝに報告する。1953 年 6 月より 9 月にかけて京都市内 2 カ所の牛舎に於て、一応コガタアカイエカと思われる雌成虫を採集し、実験室で産卵孵化させ卵群別に飼育し、卵群別に幼虫第 4 令脱皮殻、蛹脱皮殻を得て成虫に迄飼育した。その飼育卵群中に幼虫側鱗数、側鱗列の形質からシロハシイエカと見做し得る 1 卵群があつたので、この卵群より生じた雌雄成虫翅脈柄室比を測定した。測定は R_{4+5} の分岐点から R_2 と R_3 の分岐点迄を R_p とし、 R_2 と R_3 の分岐点から R_2 と R_3 の末端を結ぶ線の中点を延長し翅縁と交叉した点迄を R_2 室の長さとし、簡単に R_2 と呼ぶ事にした。又 M_p , M_2 も同様である。測定した雌雄別 R_2/R_p 及び M_2/M_p の値の度数分布型は直線変換の結果何れも正規型と認定した。母集団に於ける R_2/R_p の平均値は雌では 2.20~2.32, 雄では 1.71~1.77 の範囲内にあり、同じく M_2/M_p の平均値は雌では 1.71~1.81, 雄では 1.51~1.57 の範囲内にある (信頼度 95 %)。又 1 個体を採つた場合の雌の R_2/R_p 値の棄却限界は 1.92~2.60 (危険率 5 %) となり、この値は徳永 (1943) に示されている値 1.5 より大きく又佐々・浅沼 (1948) に示されている値 3 より小さい。雄の R_2/R_p 値の棄却限界は 1.48~2.00 (危険率 5 %) である。次に雌の M_2/M_p 値の棄却限界は 1.46~2.06 (危険率 5 %) になる。徳永 (1943), 佐々・浅沼 (1948) の記載によるとコガタアカイエカの値は 2, シロハシイエカの値 1.5 はとなり、今回の測定値の範囲は両種の間にもたがつており、 M_2/M_p のみを目標として同定するならば、今回の材料は何れの種とも決定出来ない。雄の M_2/M_p 値の棄却限界は 1.30~1.78 (危険率 5 %) である。結局京都附近に分布するシロハシイエカ雌成虫は M_2/M_p 値が従来の知見と異つており、この形質のみを目標としてコガタアカイエカと区別する事は出来ず、本種の翅脈柄室比による分類は再検討を要すると思う。(京都府立医科大学・医動物学教室)